TEAM NAKACHU

四万十市立中村中学校
主幹だより　No. 3
２０２２・５・１６

体育教科部会の実践

～実践研究協働校事業の教材研究会等を通して～

体育教科部会では、５月の授業研究会に向けて３月末からの小学校との指導案検討会、中学校のみの指導案検討会、先日の教材研究会等を通して、様々な取組を進めています。今回は、まずそれらを紹介します。

5/9 小中合同校内研修　小中体育部会

先日の小中合同校内研修で、各部会の写真を撮りに回っているときのことです。次のような声が聞こえてきました。

前田先生：「子供の有能さを引き出す。これがキーワード。」

齊藤先生のご講話から学んだことを早速意識されています。

平岡先生：「小学校では、『する・見る・支える・知る』は体育館に貼っていますか。」

体育科の見方・考え方が浸透しています。

小学校の先生方の「はい。」を受け …

小中合同校内研修後、早速、大久保先生が見方・考え方の掲示物を作ってくれて、体育館に貼られています。

先日の大久保先生、平岡先生の授業でもこれらの視点で、生徒に自分たちの取組を振り返らせていました。

教科主任が教科部会で共有（確認）したいこと

4/28 保健体育科教材研究会　齊藤先生のご講話を受けて

国語
- 生徒に成長実感を持たせる授業づくりを行い、その成長実感をどうはかるのかということを考えることの大切さ。
- できていることを視える化（可視化）して比較する。または、できていないことを視える化（可視化）していくということを意識していきたい。

社会
- この教材、題材を通してどういう能力を育てたいのか、どういう人間性を育てたいのかを考える。
  ⇒社会では「公民としての」資質・能力を育成することが大切。人が存在する授業づくりを目指す。
- 焦点化、比較・関連付け ⟺ 言語化、見える化　言語化することにより共有し、次へ。

数学
- 「Why」なぜその単元を学ぶのかを内容だけでなく資質・能力ベイスで考えて単元構想をする。
- 「What」 Why をうけて、育成すべき資質・能力に向けて、数学的活動（授業）を通して、具体的に何ができるようになるかを明確にし、授業づくりをすること。

理科
- 学指に書いてあることがどういう意図で書かれたのか、考えていきたい。
- 付ける力がどのように変化してきたかを知ることで、今求められることを考えたい。

音美技家
- 美術（音楽・技術・家庭科）全体として、どういう子供を育てたいのか考える。
- 問題解決のプロセスを大切にする。　可視化→焦点化

体育
- 現在の授業で求められている生徒の能力の価値(良さ、働き、役割)をつかませるという明示的指導を具体的に行っていくことが大事。
- 生徒自身が課題を発見し、今の自分がどういう状況にあるかを知り、どういう自分を目指すか（個別最適）を重視し、合理的な解決をしていくために、より効果的に ICT を活用し、成長過程の確認をしていく。

英語
- 生徒が『合理的解決』ができるように学習過程を組織していくということは、他教科でも必要な考え方だと感じた。例えば、英語では、場面に沿った課題を感覚的にではなく、生徒が持っている知識・技能や新しく学んだ知識・技能を、その使用場面などを適切に判断しながら用いて、課題解決していくことが必要で、そのためにどのような学習活動を設定するか、ということを教科会でさらに協議していく必要があると考えた。
- 生徒に言語化させることの大切さを再認識できた。感覚的に分かったこと、できるようになったことをしっかりと言語化してまとめ・振り返りをすることで、それが形として残り、確かな知識として定着したり、他者と考えを共有したりすることにつながると感じた。そのためにも、何が授業のポイントなのか、何を言語化させる必要があるのか、という点についても計画しておく必要があると感じた。

各教科部会でも、再度、確認しましょう。
他教科の教科主任が考えたことも授業改善の視点になりますね。